九州地方域方言におけるキリシタン語彙pater/padreの受容史についての地理言語学的研究

小　川　俊　輔

Ⅰ．はじめに

1．本稿の目的と方法

本稿は、九州地方域方言におけるキリシタン語彙*1 pater/padre（神父）の受容史の考察を目的とする。九州地方全域300地点において方言実地調査を行い*2、得られた資料から方言事象分布地図を描き、方言事象の分布を解釈することによって受容史を考察するという方法を用いる。

2．先行研究と本稿との関係

日本における言語地図解釈研究では、これまで、主に基礎語や日常生活語が研究の対象にされてきた（国立国語研究所（1966-1974）、柴田（1969、1988-1995）、藤原（1976）など）。すなわち、本稿が取り扱うような項目は、言語地図解釈研究の対象とされてこなかった。また、本稿で考察を行う「宗教と方言事象分布との関係」についても、これまでに十分な研究がなされたとは言えない状況にある*3。特に、キリスト教と方言事象分布との関係を考察した先行研究は皆無であった。

他方、文献国語史の分野では、キリシタン語彙を扱った多くの先行研究があるけれども（土井（1933）、楳垣（1943）、石綿（2001）など）、方言実地調査にもとづいて、具体的にどの地域でどのようにキリシタン語彙が受容されたのかを考察した研究は見られなかった。

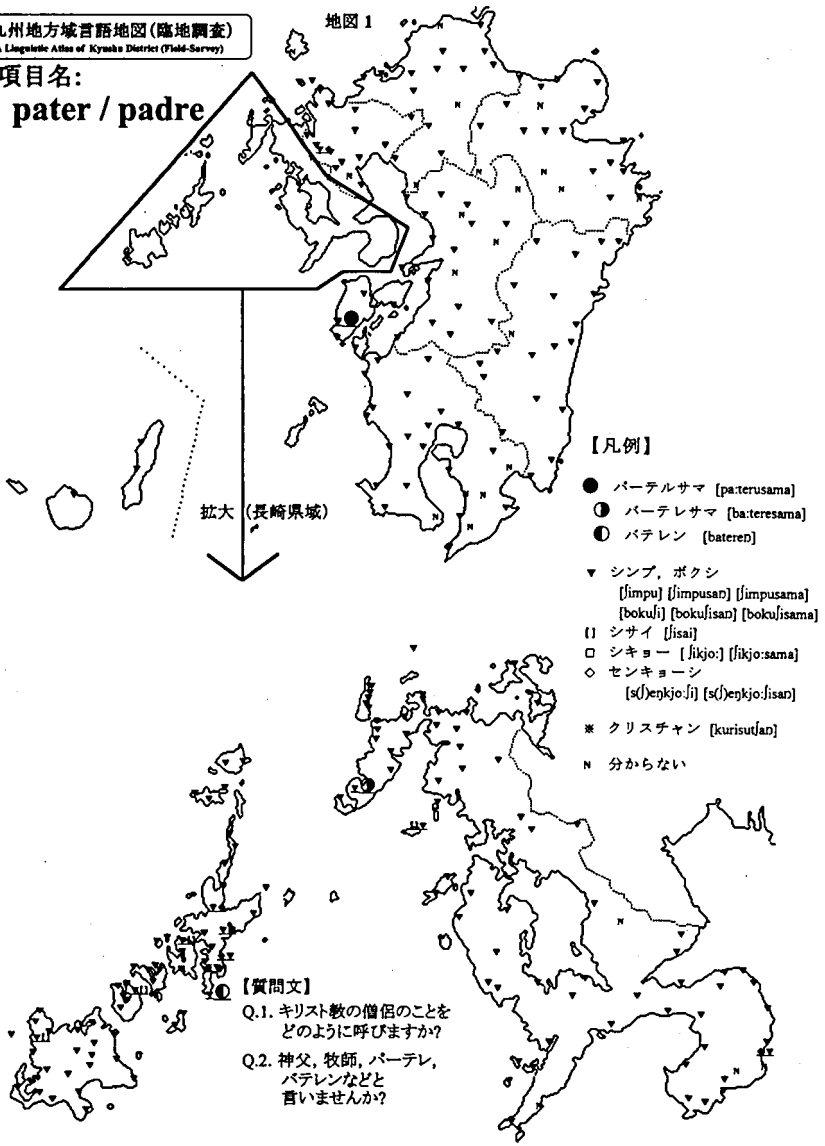
以上のような研究状況下にあって、筆者はキリシタン語彙の受容史について、九州地方全域における方言実地調査に基づいて実証的研究を行ってきた（Ogawa（2006.4）、小川（2006.5、2007刊行予定）など）。本稿は、筆者によるキリシタン語彙の受容史に関する地理言語学的研究の一部をなすものである。

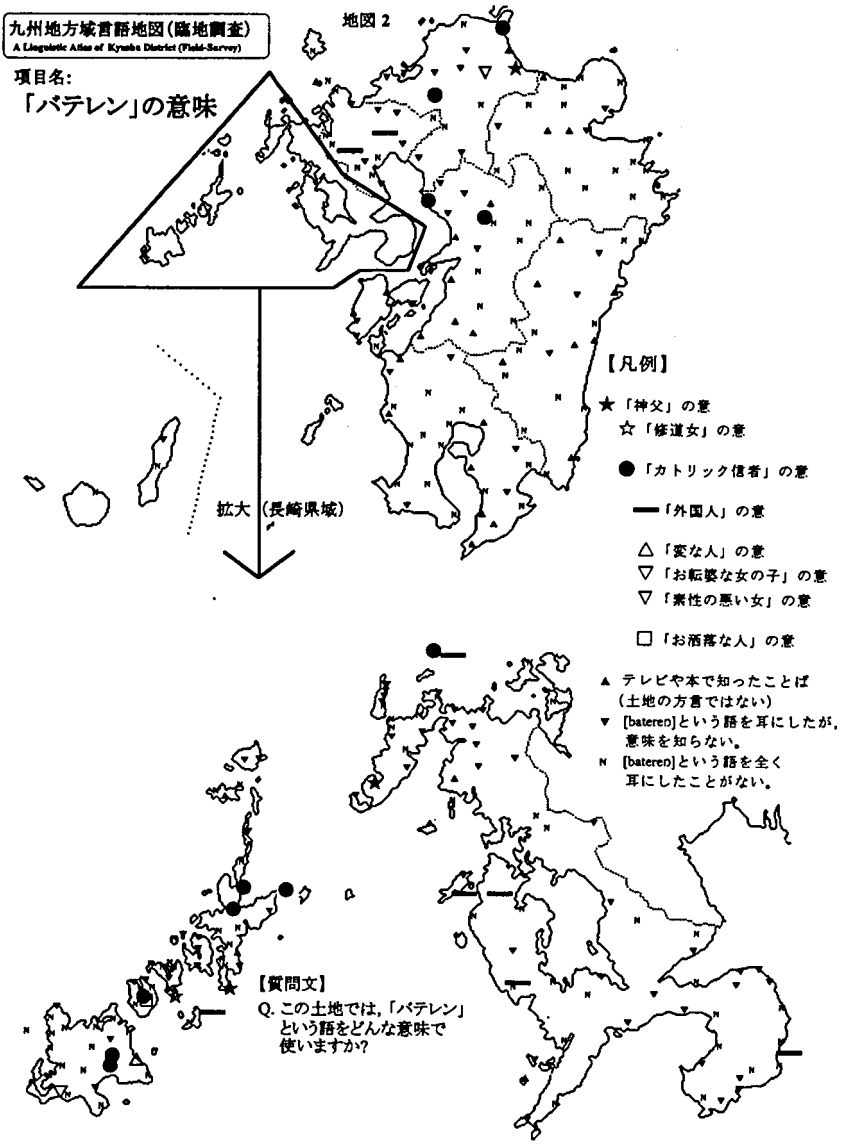
3．質問文

質問文１：キリスト教の僧侶のことをどのように呼びますか？

質問文２：神父、牧師、パーテレ、バテレンなどと言いませんか？

質問文３：この土地では、「バテレン」という語をどんな意味で使いますか？


九州地方域言語地図(臨地調査)
A Linguistic Atlas of Kyushu District (Field-Survey)
項目名:
pater / padre
地図 1
拡大 (長崎県域)
【凡例】
● パーテルサマ [pa:terusama]
◑ バーテレサマ [ba:teresama]
◐ バテレン [bateren]
▼ シンプ, ボクシ
[ʃimpu] [ʃimpusan] [ʃimpusama]
[bokuʃi] [bokuʃisan] [bokuʃisama]
[] シサイ [ʃisai]
□ シキョー [ʃikjo:] [ʃikjo:sama]
◇ センキョーシ
[s(ʃ)eŋkjo:ʃi] [s(ʃ)eŋkjo:ʃisan]
※ クリスチャン [kurisutʃan]
N 分からない
【質問文】
Q.1. キリスト教の僧侶のことを
どのように呼びますか?
Q.2. 神父, 牧師, パーテレ,
バテレンなどと
言いませんか?


九州地方域言語地図(臨地調査)
A Linguistic Atlas of Kyushu District (Field-Survey)
地図 2
項目名:
「バテレン」の意味
拡大 (長崎県域)
【凡例】
★「神父」の意
☆「修道女」の意
●「カトリック信者」の意
—「外国人」の意
△「変な人」の意
▽「お転婆な女の子」の意
▽「素性の悪い女」の意
□「お洒落な人」の意
▲ テレビや本で知ったことば
(土地の方言ではない)
▼ [bateren]という語を耳にしたが,
意味を知らない。
N [bateren]という語を全く
耳にしたことがない。
【質問文】
Q. この土地では,「バテレン」
という語をどんな意味で
使いますか?

Ⅱ．方言事象分布の概観

1．[paːterusama] [baːteresama] [bateren] の辺境孤立遺存分布

いずれも古い事象と考えられる [paːterusama] [baːteresama] [bateren] がそれぞれ1地点ずつ分布している。[paːterusama] は熊本県の天草地方に、[baːteresama] は長崎県の平戸島に、[bateren] は長崎県の五島列島に分布している。どの地点も離島地域である。また、どの地点も [ʃimpu] または [bokuʃi] という事象と共に回答されている。当該の併存事象に対して、それぞれの被調査者は次のように説明した。(「被調査者の説明」、(調査地、被調査者の生年、調査年月日) の順に記す)

「昔は [paːterusama] と言った。今は [ʃimpusama] と言う。[paːterusama] は明治生まれの人が言っていた。」

(熊本県天草市天草町大江大字野中、昭和2年生、2005.10.30)

「主に [ʃimpusama] と言うが、[baːteresama] とも言うだろう。」

(長崎県平戸市津吉町、大正14年生、2004.5.12)

以上の地理的分布及び併存事象に対する被調査者の説明から、[paːterusama] [baːteresama] [bateren] は辺境孤立遺存分布を示しているものと解釈される。

2．[ʃimpu] 類及び [bokuʃi] 類の全域分布

[ʃimpu] 類及び [bokuʃi] 類は九州地方全域に分布している。本来、[ʃimpu] はカトリックの僧侶を、[bokuʃi] はプロテスタントの僧侶を表す事象であるけれども、方言実地調査の結果、両者を厳密に使い分けている人は少ないことが明らかとなった。試みに [ʃimpu] 類と [bokuʃi] 類に別々の符号を与えて言語地図を作製してみたが、特に有意味な分布を示さなかったため、両者に同一の符号を与えることとした。一見のとおり、当該事象は同地域における共通語的事象として用いられている。

3．[bateren] の語義の派生

地図2は、[bateren] がどのような意味で使用されているかに注目して描いたものである。具体的には、次の意味で使用されている。神父、修道女、カトリック信者、外国人、変な人、お転婆な女の子、素性の悪い女、お洒落な人。それぞれ固有の分布領域を持っていることが注目される。

Ⅲ．方言事象分布の歴史的解釈

1．[pa:terusama] [ba:teresama] [bateren] の語源

まず、最古の事象とみられる [pa:terusama] [ba:teresama] [bateren] の語源について考察する。当該事象の語源は、ラテン語のpaterまたはポルトガル語・スペイン語（同じ綴り）のpadreであろうと考えられる。従来、[bateren]（バテレン・伴天連）の語源はポルトガル語padreであると考えられがちであった*4。これは中世末期から近世期にかけて、多くのポルトガル語が日本語の語彙体系の中に取り入れられたという事実から推定されたものであり、一定の説得力を持つ説ではある。しかし、ポルトガル語であるとの断定はできない。まず、スペイン語のpadreについて考慮すべきである。近松（1980）『中世スペイン語辞典』によれば、1517年にスペインで出版された文献中にpadreが使用されている。他方、イエズス会を中心とした中世期のキリシタン宣教師には、ポルトガル人と同様にスペイン人もいたことが知られている。よって、[bateren] の語源としてpadreを仮定するのであれば、「padre：ポルトガル語またはスペイン語」としなければならない。さらに、ラテン語paterも考慮に入れる必要があろう。回答された [pa:terusama] [ba:teresama] の第３音節はともに [te] であり、padreよりもpaterに近い。このことは [bateren] も同様である。以上のことから、筆者は従来の「[bateren]（[pa:terusama] [ba:teresama]）の語源はポルトガル語padre」という立場はとらず、「ラテン語のpaterまたはポルトガル語・スペイン語（同じ綴り）のpadreである」と考えている。

2．pater/padreから [pa:terusama] [ba:teresama] [bateren] への交替

[pa:terusama] と [ba:teresama] は、pater/padreを原語音のまま発音しようとして生まれた事象であろう。中世末期から近世初期にかけて記されたキリシタン文献上には、パアテレ・パアデレの用例が『Doctrina Chriſtan』（1592年刊）、『ばうちずもの授けやう』（1593年刊）、『おらしよの飜譯』（1600年刊）、『日本大文典』（1604-08年刊）に、ハテレの用例が『ぎやどぺかどる』（1599年刊）にみられる。

[bateren] については、「ポルトガル語padreに「伴天連」などの漢字をあて、その字音によって生じた」との説が有力であるけれども（『日本国語大辞典第二版』など）、方言事象の分布からそれを読みとることはできない。他方、先に挙げたキリシタン文献上に [bateren] の用例はみられないことから、最も古い事象が [pa:terusama] で、[bateren] はそれよりも新しい事象であると解釈される。[ba:teresama] の語頭の [b] については、

① [p] が有声化して生まれた事象

② 後に生まれた [bateren]（伴天連）の [b] 音への類推から生まれた事象

の２つの場合が考えられる。ただし、このことについても、方言事象分布からそのどちら

が正しいか（或いは、その両方が正しいかも知れない）について、判断はできない。

①である場合、[paːterusama] ＞ [baːteresama] ＞ [bateren] の順に新しく、②である場合は、[paːterusama] ＞ [bateren] ＞ [baːteresama] の順に新しいということになる。

3．中世末期以降の伝統をもつ事象 [paːterusama] [baːteresama] [bateren]

Ⅱ.1.に記したとおり、当該3事象は辺境孤立遺存分布を示していると考えられる。当該事象が [ʃimpu] や [bokuʃi] などの事象より古いことは明らかであるけれども、これらが当該地域において、中世末期以来使われ続けてきたものであるかどうかについては断定できない。

松崎（1928）、ラウレス（1940）、海老沢（1943）などによれば、明治初期に長崎・天草地方の潜伏キリシタン・カクレキリシタン*5を再びカトリック教会へ「戻す」（中世期に布教活動を行ったのはカトリックであり、潜伏キリシタン・カクレキリシタンは中世期にカトリックへ改宗した者の子孫である故、「戻す」と表現されている）目的で、潜伏キリシタン・カクレキリシタンが代々受け継いできたラテン語・ポルトガル語を用いたカトリック教理書が長崎で多く編纂・出版された。そのことは、明治文化研究会（1928）に翻刻された資料からも確かめることができる。また、純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（1986）記載のプチジャン司教の書簡（1865年5月29日付）に、「布教や教理書出版の際には、潜伏キリシタン・カクレキリシタンが代々受け継いできたことばを使用しなければ、自分たちを潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人びとが信仰してきたものとは異なる宗教の指導者のように思わせてしまうので、それらのことばを使うべきである」との見解を示した記事がある。ただし、これらの事実をもってしても [paːterusama] [baːteresama] [bataren] が中世期から使用され続けてきた事象であるとの断定はできない。しかし、中世末期以来の伝統を引き継ぐ事象であることは確かである。

4．[paːterusama] [baːteresama] [bateren] から [ʃimpu] [bokuʃi] への交替

[ʃimpu] も [bokuʃi] も共に、明治以降に使用されるようになった事象であり、九州地方全域に分布している。方言事象の分布より「[paːterusama] [baːteresama] [bateren] から [ʃimpu] [bokuʃi] への交替が起きた」ことを読みとることができる。Ⅱ.1.に記した熊本県天草市天草町大江大字野中の被調査者のコメントはこれを傍証する。恐らく、明治期や大正期には、中世末期以降の伝統を持つ諸事象（[paːterusama] [bateren] など）が現在よりも広い地域で使用されていたものと考えられる。

5．[bateren] の語義の派生に関する地理言語学的考察

Ⅱ.3.に記したとおり、[bateren] は当該地方において様々な意味で使用されている。

神父、修道女、カトリック信者、外国人、変な人、お転婆な女の子、素性の悪い女、お洒落な人などの意味で使用されており、それぞれ固有の分布領域を持っていることについては先に記したとおりである。以下では各事象についてそれぞれの語義と地理的分布から歴史的解釈をこころみる。

5.1. 神父を意味する［bateren］

「神父」の意の［bateren］は、原語（pater/padre）の語義を保存した最も古い事象とみられる。この事象は、長崎県南松浦郡新上五島町桐古里郷佐尾、福岡県築上郡築上町船迫で回答された。前者はいわゆる「離島・僻地」の漁業集落であり、後者はJR日豊本線沿いの農業集落である。また、前者の町には、現在、カトリック信者、仏教徒、カクレキリシタンがそれぞれの信仰を持ちつつ共存している。このことから、この土地は中世末期以降のキリシタンの歴史を持っていることが分かる。他方、後者の集落は、大正期以降に五島列島からカトリック信者が集団で移住し形成されたことが知られている。被調査者から「私は小学校の時に頭ヶ島（上五島に属する一小島）から移住してきた」との説明があった。以上のような土地（集落形成）の歴史から、同集落内において中世末期以来の伝統的な事象（=神父を意味する［bateren］）が使用されているのであろう。

5.2. 修道女を意味する［bateren］

「修道女」の意の［bateren］は、「神父」の意からの派生であると考えられる。神父も修道女も「キリスト教会における指導者」であり、無理なく派生しうると考えられる。この事象は、長崎県五島市奈留町泊郷前島の被調査者から回答された。この集落は福江島と並んで下五島の主要な島である奈留島から連絡船を乗り継いで渡る小島であり、「離島・僻地」地域である。また、平成7年までカクレキリシタンの組織的信仰が継続した土地でもある（宮崎（2002）による。pp.222-223）。以上の歴史的・地理的状況はⅢ.5.1.に記した長崎県南松浦郡新上五島町桐古里郷佐尾のそれと近い。

5.3. カトリック信者を意味する［bateren］

「カトリック信者」を意味する［bateren］は、長崎県五島列島の6地点、長崎県平戸市大島村的山、福岡県北九州市門司区広石、福岡県三井郡大刀洗町今、熊本県合志市幾久富字二子の計10地点で回答されている。福岡県北九州市門司区広石を除く9地点全てが「離島・僻地」地域である。また福岡県三井郡大刀洗町今は、中世末期以来の潜伏キリシタン所在地として知られており、現在集落のほぼ全員がカトリック信者である。

出典は明らかにされていないが、『日本国語大辞典第二版』に「（［bateren］は）江戸中期から明治初期にかけてキリスト教とその宗徒に対する偏見を含んだ俗称として用いられた」とある。同書の記載に従うならば、計10地点で回答された「カトリック信者」を意味

する［bateren］は江戸中期以降の事象であり、古態遺存分布を示しているものと解される。いずれも「離島・僻地」地域に分布していることはその傍証であると言える。福岡県北九州市門司区広石は「離島・僻地」地域ではないが、明治以降全国から人々が集まってきた土地であり、古い言葉が持ち込まれた可能性がある。

5.4. 外国人を意味する［bateren］

「外国人」を意味する［bateren］は、長崎県五島列島に属する樺島、長崎県平戸市大島村的山、長崎県本土の西彼杵半島及び島原半島に計4地点、佐賀県西松浦郡有田町、佐賀県多久市北多久町小侍の計8地点に分布している。辺境地域ではあるけれども、「離島・僻地」地域ではないところにも分布の見られる点が注目される。

「外国人」を意味する［bateren］は、「神父」を意味するpater/padreからどのように派生したのかについて、以下に記す被調査者の説明はたいへん示唆的である。

「バテレンは耳にしていた言葉。外国から来た人のこと。」

（佐賀県多久市北多久町小侍、大正末生、2005.8.29）

明治以降、九州地方のカトリック教会における布教・宣教担当の神父として、多くの外国人宣教師が来日し、活動に当たっていたことについては多数の地点の被調査者から報告があった。そのことは教会の調査においても確かめられた。

当初、「外国人神父」のことを［pa:terusama］［ba:teresama］などと呼称していたところから、「神父」の意味が脱落し、単に「外国人」を意味するようになったのであろう。上に引用した被調査者の説明は、まさしくその過程を表しているものと解される。

この意の［bateren］は、「キリスト教の－」の意を残した［bateren］よりも新しい事象であると考えられ、そのことは分布領域にも反映している。すなわち、古い意味（「キリスト教の－」の意）を残した［bateren］が辺境地域の中でもとりわけ「離島・僻地」地域に分布しているのに対し、外国人の意の［bateren］は辺境地域ではあっても、九州本土地域を中心に分布しており、「古態が周辺部に残る」という地理言語学の原則に従っているのである。

5.5. その他の事象

［bateren］には上記の語義の他、変な人、お転婆な女の子、素性の悪い女としての用法がある。これらの差別的な意味を含んだ事象については、小川（2007）で考察した「［kiriʃitan］という事象とキリスト教・キリスト教徒に対する意識との相関関係の問題」とも関わるものと思われ、熊本県の一人の被調査者が［bateren］について、「［bateren］は昔の人がキリスト教のことを言っていた。「化け物」といった意味合いがあった（熊本県荒尾市日の出町、昭和12年生、2005.10.1）」と説明したことと合わせてたいへん興味深い問題であるけれども、紙幅の都合上本稿では取り上げない。

Ⅳ．まとめ

以上の考察をまとめ、結論を記す。

1．これまで［bateren］（伴天連）の語源はポルトガル語padreであるとの考え方が一般的であったけれども、ラテン語pater及びスペイン語padreも語源として考えるべきである。

2．中世末期以降、キリシタンの布教にともなってもたらされたpater/padreは、当初、原音に忠実に［pa:teru］などの事象として受容され、その後、新しく「ba:tere」［bateren］などの事象が用いられるようになったと解釈される。明治以降、新しい事象［ʃimpu］及び［bokuʃi］が力を得て、九州全域で使用されるようになり、［pa:teru］［ba:tere］などの中世末期以来の伝統を持つ事象は辺境地域に古態遺存分布を示すこととなったものと解釈される。

3．原義では「神父」を意味するpater/padreは、［bateren］という事象によって広く使用され、各地で、特に長崎県域において、様々な新しい意味を与えられた。原義に近い「キリスト教の－」という意味での［bateren］（修道女、キリスト教信者など）は、辺境地域の中でもとりわけ「離島・僻地」などの最も奥まった地域において使用されている。他方、「キリスト教の－」という意味を持たない［bateren］（外国人）は、辺境地域の中でも中心部よりの地域（九州本土）に分布していることが明らかとなった。

注

*1　ラテン語、ポルトガル語またはスペイン語などが出自であり、中世末期以降に日本へ伝えられたと考えられるキリスト教の教義・信仰そのものに関わる外来語彙。中世末期に出版されたキリシタン資料などの文献資料に用例のあるもの。筆者による定義。

*2　(1)調査期間：2003年８月～2005年11月　(2)対象被調査者：外住歴３年以内、女性、老年層（調査時60歳以上）〈原則〉　(3)調査方法：統一調査票による質問調査、実地調査　(4)調査者：小川俊輔

*3　民俗学の領域では、各県ごとに宗教や民俗に関する分布地図が作られてきている。しかし、それらは民俗学の研究対象としてのみ扱われてきており、方言との関係で捉えるという視点が見られなかった。しかも、この民俗地図には、日本の伝統的な宗教の項目が扱われるだけで、キリスト教やイスラム教などの項目は対象外に置かれていた。他方、ヨーロッパでは、ヨーロッパ言語地図（Alinei 他（1997））及びその解説書（Alinei 他（1997））などにキリスト教と方言事象分布との関係について考察した先行研究が見られる。

*4　『日本国語大辞典第二版』などは、「バテレンの語源はポルトガル語padreである」と記している。

他方、楳垣（1963）は、中世期キリシタン文献の調査から「パーテレはラテン語のpaterから、パードレはポルトガル語padreから取り入れられたもの」と述べている。(pp.52)

*5　本稿では宮崎（2002）に従い「カクレキリシタン」を次のように定義する。すなわち、「キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫で、1873年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあって維持し続けている人びと及びその宗教」。現在も長崎県下に存在する。なお、近世期（具体的には最後の宣教師小西マンショが殉教したとされる1644年）～1873年における同種の信仰者及びその宗教を「潜伏キリシタン」と呼び、「カクレキリシタン」とは区別する。この呼称の区別は、片岡（1967)、宮崎（1996、2002）に従うものである。

【主要参考文献】

Alinei, Mario 他（1997）『atlas linguarum europae volume I cinquième fascicule COMMENTAIRES』, pp.253-291, instituto poligrafico e zecca dello stato libreria dello stato

Alinei, Mario 他（1997）『atlas linguarum europae volume I cinquième fascicule CARTES』instituto poligrafico e zecca dello stato libreria dello stato

James L. Taylor（1970）『A Portuguese-English Dictionary REVISED』Stanford University Press

Ogawa, Shunsuke（2006.4）「A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of the Christian Vocabulary in the Northwestern Area of the Kyushu District of Japan」, Astrid Van Nahl（編）『Dialectologia et Geolinguistica 13/2005』所収、pp.108-123, Mouton de Gruyter

P. G. W. Glare（1996）『OXFORD LATIN DICTIONARY』Oxford at the Clarendon Press

Viereck, Wolfgang（2006.11）「Chasing Butterflies: Why is a Butterfly called 'Butterfly'」, Oebel, Guido（編）『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata』所収、pp.73-76, Lincom Europa

石綿敏雄（2001.3）『外来語の総合的研究』pp.193-210、東京堂出版

楳垣實（1943.7）『日本外来語の研究』pp.66-75、青年通信社出版部

楳垣實（1963.7）『日本外来語の研究』研究社

江端義夫（2002.3）「方言文明史観」、広島大学教育学部国語科光葉会（編）『国語教育研究』第45号所収、pp.32-42

江端義夫（2006.11）「地理言語学の精神」、Oebel, Guido（編）『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata』所収、pp.111-124、Lincom Europa

海老沢有道（1943.5）『切支丹典籍叢考』pp.176-229、拓文堂

海老沢有道他（編）（1993.11）『キリシタン教理書』教文館

大武和三郎（1976.9）『葡和新辞典』大武信一

大橋勝男（1974.5-1976.10）『関東地方域方言事象分布地図』1～3、桜楓社

大橋勝男（1989.2-1992.2）『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』1～4、桜楓社

小川俊輔（2006.5）「九州地方におけるキリシタン語彙contas及びrosarioの受容史についての地理言語学的研究」、日本語学会（編）『日本語学会2006年度春季大会予稿集』所収、pp.93-100

小川俊輔（2007.3刊行予定）「九州地方域方言におけるキリシタン語彙Christàoの受容史についての地理

言語学的研究」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』第Ⅱ部第55号所収
片岡弥吉（1967.6）『かくれキリシタン歴史と民俗』日本放送出版協会
国立国語研究所（編）（1966-1974.3）『日本言語地図』1～6、大蔵省印刷局
国立国語研究所（編）（1989.6-2006.3）『方言文法全国地図』1～6、大蔵省(→財務省)印刷局
柴田武（1969.8）『言語地理学の方法』筑摩書房
柴田武（1988-1995.7）『糸魚川言語地図』上・中・下、秋山書店
純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（編）（1986.3）『プチジャン司教書簡集』pp.113-114、聖母の騎士社
近松洋男（1980.4）『中世スペイン語辞典』風間書房
土井忠生（1933.7）「日本耶蘇会の用語に就いて」、楳垣実（編）『外来語研究』第三輯所収、pp.7-22、平野書店
日本国語大辞典第二版編集委員会他（編）（2000.12-2002.12）『日本国語大辞典第二版』小学館
橋本進吉（1961.3）『キリシタン教義の研究』岩波書店
藤原与一（1976.2）『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』東京大学出版会
廣戸惇（1965.7）『中国地方五県言語地図』風間書房
松崎實（1928.9）「天主教の部解題」、明治文化研究会（編）『明治文化全集　第19巻　宗教編』所収、pp.5-20、日本評論社
宮崎賢太郎（1996.11）『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会
宮崎賢太郎（2002.3）『カクレキリシタン　オラショー魂の通奏低音』長崎新聞社
明治文化研究会（編）（1928.9）『明治文化全集　第19巻　宗教篇』pp.27-292、日本評論社
ヨハネ・ラウレス（1940.3）「プチジャン司教とキリシタン伝統」、『カトリック研究』第20巻第2号所収、カトリック研究社（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（編）（1986.3）『プチジャン司教書簡集』聖母の騎士社、に再録。pp.225-238）

付　記

本稿は、広島大学大学院教育学研究科の江端義夫先生にご指導いただいて成ったものである。また、本稿で使用した方言資料は、300名を超える話者の皆さんの温かいご協力によって集められたものである。多くの方々に心より御礼申し上げる。

― おがわ・しゅんすけ、本学大学院教育学研究科博士課程後期在学 ―